

熊本県立宇土高等学校 令和5年度(2023年度)学校評価計画表

<p><b>1 学校教育目標</b>          熊本県教育委員会の「令和5年度県立中学校・高等学校における教育指導の重点」及び「令和5年度人権教育取組の方向」等を中心に据えながら、全職員が教育者としての自覚と使命感、教育的愛情と人権感覚を持ち、資質と指導力の向上に努め、生徒一人ひとりの個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーとなる青年の育成に努める。さらに、本校建学の精神である「質実剛健」のもと百年を超える伝統を継承しつつ、中高一貫教育校として新たな発展と創造をめざす。          中高一貫教育校としての利点を生かし、効果的な教育のあり方を研究するとともに、地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。</p>
--

<p><b>2 本年度の目標</b></p> <table border="0"> <tr> <td>1 安心安全な学習環境づくり</td> <td>2 自治力向上</td> </tr> <tr> <td>3 学習力向上</td> <td>4 探究力向上</td> </tr> <tr> <td>5 多様な進路実現</td> <td>6 グローバル研修の再構築</td> </tr> <tr> <td>7 スーパーサイエンスハイスクールの取組推進</td> <td></td> </tr> </table>	1 安心安全な学習環境づくり	2 自治力向上	3 学習力向上	4 探究力向上	5 多様な進路実現	6 グローバル研修の再構築	7 スーパーサイエンスハイスクールの取組推進	
1 安心安全な学習環境づくり	2 自治力向上							
3 学習力向上	4 探究力向上							
5 多様な進路実現	6 グローバル研修の再構築							
7 スーパーサイエンスハイスクールの取組推進								

3 自己評価総括表

大項目	評価項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校経営	開かれた学校づくり	・公開授業・発表会の開催 ・広報活動・入学希望者確保	・7月と11月に公開授業、7月に発表会を公開 ・中学校志願者140人以上、高校志願者200人以上	・UTO Well-Being探究Award2023を熊本城ホールで開催 ・年間4回、小中学校、塾に広報チラシ3000枚配布 ・11月、12月にグランメッセでの探究取組紹介 ・HP、PTA広報誌、同窓会報、テレビCM市・町の広報誌	B	・7月の公開授業では42人の教育関係者の来校、UTO Well-Being探究Award2023では保護者を含めた246人の来場者があり「創造・挑戦・感動」の教育活動の実践を外部に発信することができた。 ・中学校志願者は96人 ・チラシ5000枚配布
	学校の魅力化	・スーパーサイエンスハイスクールの取組推進 ・将来、国内外で活躍する人材育成 ・生徒主体の活動推進	・探究的な学びの全校展開 ・グローバル研修の再構築 ・自治力向上	・教科の枠を超えた3人組、探究の問いを創る授業デザイン研究会、ウエルビーイング市民講座の開催 ・既存の国内外の研修や修学旅行等を含めた再検討 ・生徒と職員共に従来の体育祭、生徒総会、文化祭等の内容検討と改善 ・校則見直し検討委員会の新設	B	・探究の問いを創る授業デザイン研究会を7月と2月に実施。 ・年間を通じたオンライン英会話を中・高で実施、国内英語キャンプ参加促進等、国内でも校内でもグローバル体験ができる環境を整える方針を職員間で合意形成できた。 ・職員の生徒会顧問を廃止、運営委員が生徒会の相談役となる。
	本校独自の中高一貫教育プログラムの開発と実践	生徒の本校での学びに対する満足度	・中高一貫6年間の学びを見据えた授業改善 ・中学校独自の体験活動と高校の効果的な学びの接続	・UTO探究週間の新設 ・職員研修11月6時間、1月4時間の実施 ・中高生徒・職員が連携する学習活動・行事・研修等を企画	A	・10/28～11/5の9日間、宇土探究週間を実施した。生徒は自らの学びを俯瞰し、個別最適な学びを充実させた。 ・TSMC関連会社と台湾静宜大学訪問(4日間)を企画、中学生、高校生、保護者、教員の25人の参加。参加者は台湾の工業発展と異文化に触れ、自身のキャリアデザインに影響を受けた。
	業務改善・働き方改革	時間外従事時間	・時間外業務従事時間10%縮減 ・平日の時間外業務従事時間目標(40h)	・放課後時間増(教育課程変更に伴う授業時間減少による) ・ノー残業デー、8月定時出退勤月間の設定 ・月80時間超をゼロにする校務改革 ・12月までに学習アプリ、デジタル採点の検証 ・模擬試験監督等に卒業生からなるスクールサポートスタッフを活用	B	・各種調査、授業での小テスト、採点などでICTを活用し、効率化を図った。 ・8月に定時出退勤を実施した。 ・時間外従事時間は昨年度と変わらなかった。 ・卒業生からなるスクールサポートスタッフ導入、職員の休日業務が軽減。
		教職員の健康増進及び福祉の確保	年休取得12日以上	・学校閉庁日の設定 ・メンタルヘルス職員研修の実施 ・衛生委員会の充実	A	・年休取得13.2日を達成(昨年の1.1倍) ・長時間勤務者が固定しており、業務の平準化が課題 ・衛生委員会で毎月職員の健康状態、業務負担状況を確認し、指導・助言や産業医面談を行った。
学力向上	学力向上	教師・生徒双方の授業の充実度の向上	・教師の授業充実度昨年比プラス ・生徒の授業満足度90%以上 ・生徒U-KI指数50%	・年2回の公開授業の開催 ・授業研修(職員研修)時間の増加 ・教師、生徒双方の授業評価による授業改善の確認	A	問いを創る授業の実践度93%、生徒U-KI指数48%、公開授業や授業研修(職員研修)の充実度は高まっている。課題としては、3観点の具体的な評価場面や学力向上の視点を踏まえたシラバスづくりが挙げられる。
	評価力と学力の向上	観点別評価と学力向上の相関	・適正比率の三観点評価の実施 ・自学時間と成績の相関分析プラス指標70%以上	・定期考査の削減と観点別評価の適正実施 ・自学時間調査と成績を紐付けた分析とフィードバック	B	定期考査の削減と評価の多様化の職員理解は進んだ。課題としては、教科における評価方法や評価点のバラツキと生徒の自学を促す工夫が挙げられる。

キャリア教育 (進路指導)	自律的な学びの充実と意識の高揚	生徒自身の個別最適な学びの実現	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自習室の開設と運用</li> <li>・自律学習のサポート</li> <li>・学習状況調査の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自習室等、自学する環境の整備</li> <li>・各教科の推奨する自学内容の可視化</li> <li>・学習状況の定点調査とフィードバック</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5月ラーニングルーム開設、学びの羅針盤と称した高校2、3年各教科に学習の手引きをまとめた資料配付、5月11日進路希望調査に加えた学習状況調査の実施。</li> </ul>
		生徒自身の強みや変容の認識と自己調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3軸評価モデル開発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評定、模擬試験、コンピテンシー評価を可視化した面談資料モデルの作成</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校3年10月検討会資料では、評定、模試、コンピテンシー評価に加え、生徒のキャリアデザインの視点や学習状況調査、探究活動歴を加えた面談資料モデルを開発。Benesse VIEW NEXT2月号で紹介。</li> </ul>
	キャリアデザイン力を高めるための機会及びツールの充実	キャリアデザイン力を高めるための機会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアデザイン講座(夏・春)及び放課後</li> <li>・出前講義、企業訪問、インターンシップ充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアデザイン講座として、夏5回、春4回講座実施。放課後は最低月1回以上、職業、大学等に関する選択講座実施</li> <li>・出前講義16講座、企業訪問8事業所、学びの部屋200人超参加者</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアデザイン講座は夏4講座、春3講座実施。放課後キャリアデザインセミナーは7講座した。出前講義は16講座、企業訪問8事業所、学びの部屋は高校生168人、小学生106人参加。</li> </ul>
		キャリアデザイン力を高めるためのツールの活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料請求、OC情報収集及び管理のスタサブ運用</li> <li>・Google classroomによる情報収集及び発信</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料請求、OC参加を一元管理するツール運用により全生徒が情報収集</li> <li>・進路室で集約する情報をデータベース化して、生徒・職員で共有</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校2年でリクルートスタサブ活用による進路関連情報収集の補助ができた。</li> <li>・各学年でキャリア・進路情報に関するGoogle classroomを開設、進路室で集約する情報発信とデータベースの機能構築を図った。</li> </ul>
生徒指導	基本的な生活習慣の確立	挨拶、時間厳守、掃除	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全職員による生徒指導</li> <li>・生徒に寄り添った配慮ある対応の実践度80%以上</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝の登校、挨拶指導</li> <li>・整容指導の徹底</li> <li>・生活委員会によるあいさつ運動</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒部、学年部で朝の登校、挨拶指導を行い、時間の厳守や挨拶、整容について、注意、喚起を行っている。生活委員会が挨拶運動を行い、生徒による主体的な活動ができている。さらに、気持ちのよい挨拶や、時間を守る意識の向上を目指したい。</li> <li>・整容については防寒期の服装について見直しを含め、検討を進めていきたい。</li> </ul>
		交通ルールの遵守とマナーの向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通ルール遵守率80%以上</li> <li>・交通事故等1%以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期的な交通指導</li> <li>・啓発用のチラシの作成と掲示</li> <li>・交通安全教室の実施</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6件の自転車事故の報告が上がっている。出会い頭の接触事故が多かった。生徒による交通ルールの遵守、マナーの向上についての評価は80%であったが、保護者と職員の評価はそれを下回っている。</li> <li>・日頃の取組を引き続き行い、交通講話等についてもよりよいものを検討し、事故防止に繋げたい。</li> </ul>
	自主性や社会性及び公共性を身につける	生徒会中心の行事の運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会主催の行事の企画・運営の充実度(満足度90%以上)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育祭、文化祭、クラスマッチの内容の見直し</li> <li>・各種行事の生徒会を中心とした活動の推進と充実化</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナウイルス感染症移行後、生徒の取組はコロナ禍前のような活気ある行事の成功を目標に生徒会を中心として実施できた。今後は生徒の自治力向上のため、教師の支援の在り方が課題になってくる。</li> </ul>
人権教育の推進	命を大切にすることを育む指導	すべての活動をとおり人権を大切にし、あらゆる差別の解消をめざす生徒の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自他を尊重する態度の育成</li> <li>・他者を共感的に受容するコミュニケーション力の育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人権作文・標語等の作成と応募</li> <li>・いじめ防止委員会に所属する生徒が主体的に行うLHR等、積極的な人権活動の実施</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人権メッセージ・標語については学校全体で取り組み、積極的な参加、応募が見られた。</li> <li>・いじめ防止委員会ではメッセージ・標語の選考、展示さらに宇土市のイベントでも発表した。</li> </ul>
		人権教育の指導方法の改善・充実	学校の教育活動全体を通じた人権教育の推進と組織的な取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全職員による共通理解と実践</li> <li>・家庭への啓発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学期1回の職員研修の実施</li> <li>・学期1回の人権LHRの実施</li> <li>・学期1回の人権だよりの発行</li> </ul>	B
特別支援教育	特別支援を必要とする生徒への支援と対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実態に応じた適切な支援</li> <li>・迅速な情報共有</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実態の把握と情報共有</li> <li>・生徒理解研修の実施</li> <li>・支援体制の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月や学期ごとの実態調査の実施、生徒理解研修の実施</li> <li>・サポート会議の月1回の開催と臨時的開催</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期的(月1回)のサポート会議が実施できた。</li> <li>・生徒理解研修も実施できた。</li> </ul>

	関係機関と連携した支援の充実	・専門機関と連携 ・情報共有と支援の質の向上	・外部の専門機関や巡回指導員、教育相談員、SCとの連携 ・定期的なサポート会議での情報共有と支援の向上	・必要な指導助言を受け、学校及び生徒の実態に応じた支援  ・入力シートを活用し情報を共有し、必要に応じてサポート会議を実施	B	・SC、SSWとの連携はとれた。 ・上記以外の専門機関との連携を必要に応じて行っていく。 ・入力シートは活用できたが、入力のみで終わってしまうことが課題である。
いじめの防止等	いじめ防止に向けた生徒と職員の協働	いじめの早期発見および伝える方法の多様化	・いじめアンケートの実施方法及び回数の改善  ・アンケート以外の情報収集	・様々な問題を抱える生徒に対応するため、いじめに関するアンケートの多様化と回数の増加 ・安全安心強化月間を設け、生徒が職員へ日常的・気軽に相談できる環境を構築	B	・いじめに関するアンケートの実施については、情報集約担当者で情報を管理し、担任や学年との連携を図った。 ・安全安心強化月間を利用してSNSの利用に関する注意喚起を行った。
		いじめ問題に対応する組織の活性化	・いじめに対応する諸会議の役割分担を明確化する	・人権教育実践委員会による具体的な活動 ・校内いじめ防止対策委員会による現状把握 ・いじめ防止対策協議会による対策案検討	A	・実践委員会ではLHRの企画・運営及び宇城人研大会・宇城学人研大会にて役員を務めていただいた。 ・校内いじめ防止対策委員会については定期に加え、問題事案発生時に臨時に会議を招集して対策を検討した。
地域連携(コミュニティスクールなど)	コミュニティ・スクールの活性化	学校運営の改善	教育課程の編成、学校経営計画、防災体制等、学校全般についての協議	年2回の学校運営協議会の開催	B	学校運営協議会を2回開催し、学校経営計画、地域への情報発信、働き方改革等貴重なご意見をいただいた。委員の前向きな評価・助言を受けて、今後の学校経営に生かしていく。
	地域との連携	地域、小中学校及び高校間の連携	・小学生との連携  ・地域との連携	・小学生学習支援ボランティア「学びの部屋」の開催 ・地域清掃ボランティア ・地域の資源を利用した課題研究の展開	A	・小学生学習支援ボランティア189人参加、小学生126人参加 ・学校周辺の河川の浚渫ボランティアに10人が参加 ・2年生の課題研究において19件(全61件)が地域課題解決に向けた研究に取り組んでいる。
図書館活動	読書活動の活性化	図書館利用率の向上	デジタルツールを活用した図書館からの情報発信(年間30回以上)の閲覧者数10%増加	・デジタルツールでの情報発信および周知 ・職員向け情報提供 ・読書活動に関するアンケートの実施	B	・来館者は前年比10%増、貸出冊数は前年比微増だが、リクエストと予約が増えている。 ・情報発信の効果、図書館へのニーズの高まりがうかがえる。
			・図書委員会活動の充実  ・クラスへの周知活動の充実	・月1回の広報誌『らいぶらりいたいむず』の発行 ・月替の図書館特別展示コーナー設置 ・宇城地区図書委員会研修での学びを学校での活動に活用	A	地区研修会の学び等を活かし、動画作成、広報誌作成、展示コーナー作成などの活動は充実して行うことができています。効果を検証し生徒主体の読書活動の活性化を図りたい。
SSH	第Ⅲ期SSH研究開発の構想の具現化	全生徒を主対象とするSSH研究開発の展開	・UTO Well-Being探究Award2023の開催 ・課題研究の指導方法と運用の再構築	・探究Award2023で、全生徒が当事者意識を持つ準備運用 ・SS/GS/学際課題研究の指導体制と予算及び発表機会の視点を重視した運用の再構築	A	・高校3年の発表機会から中2～高3までの探究成果発表の場、生徒主体の進行へと規模の拡大ができた。 ・SS、学際物理、生理、気象学会に加え、GSのマイプロ、キャリア甲子園、県庁発表等の発表機会拡大ができた。ロジックプログラム関連メディア発信は、TV8件、新聞2件。
		第Ⅲ期採択時の文部科学省からの指摘事項に対する留意	・Well-Beingなど新たな人材育成の成果の可視化  ・計画や準備状況の進捗状況の可視化と無理のない運用	・学校設定科目WB I、JWB、J-Tech、ロジックプログラムのシラバス開発と評価運用、ウェルビーイングシートの開発と運用 ・アセスメントやガイドブック、課題研究の評価等、進捗状況の可視化と整理	B	・WB I、JWB、J-Techにおいて教科横断型授業開発を進めることができ、ロジックプログラムでは全生徒主対象として探究の展開ができています。ウェルビーイングシートはキャリアデザインと関連付けた様式の開発を進めている。 ・課題研究の評価はルーブリック、チェックリストができる体制であるものの、アセスメントの開発は不十分であり開発体制の構築が必要である。

#### 4 学校関係者評価

- ・生徒主体の活動推進（生徒の自治力向上）について、教員の生徒会顧問を廃止したことは評価できる。一方で教員のマネジメントから生徒の活動が脱しきれないところもある。
- ・観点別評価の適正実施、主体的な学びを推進する上で定期考査を削減したことは評価できる。
- ・生徒アンケートにおいて「学校が楽しい」、「授業がよくわかる」の質問では8割の生徒から肯定的な回答が得られソフト面、ハード面が充実していることがわかる。志願者数減少については内的要因より外的要因の影響が強いのではないか。
- ・生徒募集については学校ホームページを充実することも効果的である。通信制サポート校のホームページは参考になる。多様な学びや進路が詳しく説明してある。
- ・交通ルールの遵守とマナーの向上は高く評価できる。和太鼓部等、地域のイベント等にも連携できており今後とも続けてもらいたい。
- ・宇土中学・高校卒業生が台湾の台南市政府と宇土市教育委員会との交流でスタッフとして活躍していた。

#### 5 総合評価

- ・今年度より第Ⅲ期スーパーサイエンスハイスクール事業が始まり、探究の「問い」を創る授業デザイン研究会や授業研修（職員研修）により生徒の主体的な学びや評価の多様化の職員理解が進んだ。
- ・中学3年の生徒が北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール英語エッセイ中学生部門で最優秀賞、科学部地学班が第47回全国高等学校総合文化祭2023かごしま総文で全国2位相当となる「文化庁長官賞」を受賞するなど様々な分野で活躍した。また、本校職員が令和5年度文部科学大臣優秀教員表彰を受賞した。
- ・UT0探究週間(10/28～11/5の9日間)中に姉妹校提携の台湾成宜大学キャンパスツアー(3泊4日、中学生・高校生・保護者・教員の25人参加)を実施、12月には台湾の国立中科實驗高級中學を訪問し(高校生9人参加)、授業参加や自身の課題研究を英語で発表した。コロナ禍前のグローバル研修に戻ることができた。
- ・中学校で一人ひとりに個別最適化された問題を出題するAI学習システムQubenaを導入。今年度は英語の活用度が高かった。Qubenaの活用については、それぞれの教科で改善していく必要がある。

#### 6 次年度への課題・改善方策

- ・職員一人ひとりが専門性を発揮しながら、学校の活性化のために機動的かつ協働的な組織運営体制を構築するために校務分掌再編を行う。
- ・グローバル研修の再構築として、来年度から年間を通じたオンライン英会話を中学校・高校で実施することを決め、英語運用能力向上と主体的で責任感のある態度、学びの姿勢の育成につなげる。
- ・観点別評価を適正に実施しようとする余力評価が細分化、複雑化し、生徒、教員にも「何を評価しているのか」、「どのように評価しているのか」が見えにくくなっている。生徒の学習改善に資する評価のあり方に大きな課題がある。成績評価規定の見直しを行う。
- ・自転車通学生徒のヘルメット着用についての取組は、「自分の命は自分で守る」、そのために着用する必要があるとの認識の元で進めていく。生徒・保護者・教員で合意形成を図り、具体的取組を実施する。
- ・本校の強みを地域をはじめ、より多くの方々へ周知するため、広報や情報発信内容及び発信方法に工夫を行う。